平成 18 年度　茨城県人権啓発活動事業

人権にかかわる市民団体事例集

ひとりじゃない
人の心が人を支える

市民・NPOの活動が社会を変える

COMMON

茨城ＮＰＯセンター・コモンズ

優

NPO法人　活きる　宮脇貞夫さん

障がいを意識しない関係に

「相手が障がいを持っていることを忘れている時もあります」と、宮脇さん。腕に障がいがあるスタッフに重い荷物を持たせようとし、本人に指摘されたというエピソードも。
自然な関係に、穏やかな優しさを感じる。

「生きる楽しさ」を広げる

NPO法人「活きる」は2005年2月に誕生した。

在宅障がい者の社会参加、自立、経済活動を目指すこと、障がい者と地域が協働して、生活の場、働く場、余暇活動の場などの基盤作り、障がい者が積極的に地域社会とふれあい世代を超えて交流できる環境を整備することなどを目的として現在、取手市を中心に活動している。

今回お話を伺った宮脇副代表は、奥様がくも膜下出血が原因で障がいを持つようになり、在宅介護が必要になったことがきっかけで、活動に関わるようになった。

自らが障がいを持つ人も、スタッフとして活動に携わっている。「活きる」の運営には当事者としての視点が生かされている。

「家」から「外」へ

障がい者や高齢者はさまざまな事情から家にひきこもりがちになる。外出を可能にし、地域社会に触れ合う機会をつくることが社会参加の助けとなる。車による移送サービスは、外出が困難な障がい者を「外に引き出す手段」と宮脇さんは語る。現在は通院のために使用する人が多い。だが本当は、「自分の楽しみのためにも使ってほしい」と思っている。お墓参りや旅行など、日常とは違う外の世界に触れることが、生きていてよかったという実感につながると考えている。

運営にあたって、ボランティアスタッフの育成、福祉有償移動サービスの制度面などの問題を抱えてはいる。しかし、取材当日も依頼の電話が何本もあり、ニーズが高いことがうかがえた。

楽しみの創造

「活きる」では講演会・コンサートなど、さまざまなイベントも企画している。特に力を入れているのは風船バレーボールなどのリハビリスポーツの実施である。これらは治療的リハビリとは異なり、みんなで楽しむゲームとしての要素が強い。「競争すると、みんな頑張るので盛り上がります」と宮脇さん。楽しいと会話が増え、人々の交流も活発になる。

就労への模索

障がい者の就労の場を広げることがこれからの課題だ。試みとして行った、ユニバーサルデザイン食器の販売は、笠間焼きの陶芸作家が組織しているユニバーサルデザイン研究グループKDS(笠間デザインスピリッツ)との協働によるものである。しかし、現在はコストや流通システムの点で問題を抱えており、十分に機能しているとはいえない。だが、状況が整うまで待っているのではなく、自分たちができることから取り組んでいきたいと考えている。

優しさを育む

「障がい者だからかわいそう、という考え方や見方には違和感を覚える」と宮脇さんは語る。これは過去の社会背景が影響しているが、最近では良い方向に変化しているのではないかと日々感じている。特に若い世代の中に、障がいを持った人に対して自然な関わりができる人が増えている。そこには押し付けでない素直な優しさがある。このような優しさを宮脇さん自身は介護をめぐる家族の関わりから感じ取っているという。

生活の中で作られるお互いの信頼関係が優しさの基本にある。お子さんとの関係から「優しさの中で、人は優しく育つ」とも感じている。しかし、優しさに触れる機会に恵まれなかった人もいる。「社会の中にこのような活動をしている場所があることを知ってもらえれば、何か感じてもらえるのではと」宮脇さんは話す。

活きる（ｉｋｉｒｕ）のｉ

「活きる」にはシンボルマーク(左図)がある。アルファベットのｉに○が3つ。ｉは人間の存在を、3つの○は「愛・いたわりの心・いのちの尊さ」を表している。○の大きさが違うのは「小さなことから」という意味。ここに団体の思いが集約されている。メンバーはユニフォームであるジャンパーの胸にｉのマークを刻み、地道な活動を日々営んでいる。